St. Luke's International University Repository

WHO看護・助産開発協力センターグローバル・ネットワーク 第2回国際カンファレンス報告記(韓国)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2007-12-26 キーワード (Ja): キーワード (En): collaborating, centers, nursing education 作成者: 堀内, 成子, 片岡, 弥恵子, 片桐, 麻州美, 有森, 直子, 毛利, 多恵子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/359

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

報 告

WHO看護・助産開発協力センターグローバル・ネットワーク 第2回国際カンファレンス報告記（韓国）

堀内 成子[1)] 片岡弥恵子[2)] 片桐麻州美[3)]
有森 直子[4)] 毛利多恵子[5)]

要 旨

WHO看護・助産開発協力センターグローバル・ネットワークのセンター長会議と同時開催の第2回国際カンファレンスが韓国において行われた。スペシャリストの育成等の看護教育に関する展示 "Expo Nursing Edu." に聖路加看護大学のブースを開き参加した。そこで，本学学部・大学院のカリキュラムをはじめ助産に関する専門科目について紹介した。展示会場での情報交換や人々との交流を通じて，各国の大学教育や多国間地区での活動状況を知ることができた。

Global, Regional, Country, Centerレベルでの活動連携が必要なこと，地域の視点と地球規模の視点の双方を持つことの重要性を感じ，WHOセンターの一員として今後の役割について示唆を得たので報告する。

キーワーズ

WHO，看護・助産開発協力センター，看護教育

I．会議の成り立ち

1998年4月28日から5月1日まで，韓国（慶州）において，"Second International Conference of Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery"（WHO CCNM KOREA '98）が開催された。

本学は，1990年5月に，世界保健機関（WHO）指定看護開発協力センターとなり，本年度で第3期目の活動に入っている。本学と同様に指定された看護・助産協力センターは世界21カ国，34センターある。それぞれのセンターは，大学・医療機関・研究所・行政機関など様々な母体から構成されている。また，指定された専門分野は，プライマリーヘルスケア・看護研究・教育や訓練・相談に関する研究や実践に関する変革を推進することであり，各センター毎に焦点化した特定分野と目標をもっている。WHOは世界を6つの地域に分け，看護に関しては，ジュネーブの本部に看護の専門官が配置されている。本学のセンターは，WPRO地域に参加しており，この地域は，韓国・オーストラリア・フィリピン・日本の4カ国から成り立っている[1)]（図1参照）。

すべてのセンター長の集まる会議が2年に一度行われ，地域間の事業報告や評価，地域を越えたプロジェクトの推進，そして将来に向けての行動計画について討議がなされ，4年毎に大きな活動方針の見直しを行っている。1996年にバーレーンで行われたセンター長会議の時に，センター長のみでなく，一般の参加者を加えた討議や交流の機会を設けようと同時開催されたのが，この国際カンファレンスの始まりであった。

第2回目の今回は "Nursing and Midwifery: Making a Difference in Health for All" のメインテーマのもとに約20カ国800人の参加予定者で企画・開催された。会長は，グローバル・ネットワークの事務局を担当している延世大学看護学部の学長であり，センター長であるMo-Im Kim博士であった。

会場は，韓国の歴史的遺産である古墳や美しい公園の残る慶州のホテルが会場であった（写真1）。国内・国外からの参加者は近隣のホテルに宿泊して会議に出席した。本学からは，センター長会議に，学部長と小山眞理子教授が出席し，シンポジウムには羽山由美子教授と，

1）聖路加看護大学 教授（母性看護・助産学）
2）聖路加看護大学 助手（母性看護・助産学）
3）聖路加看護大学 講師（母性看護・助産学）
4）聖路加看護大学 講師（母性看護・助産学）
5）聖路加看護大学 非常勤講師

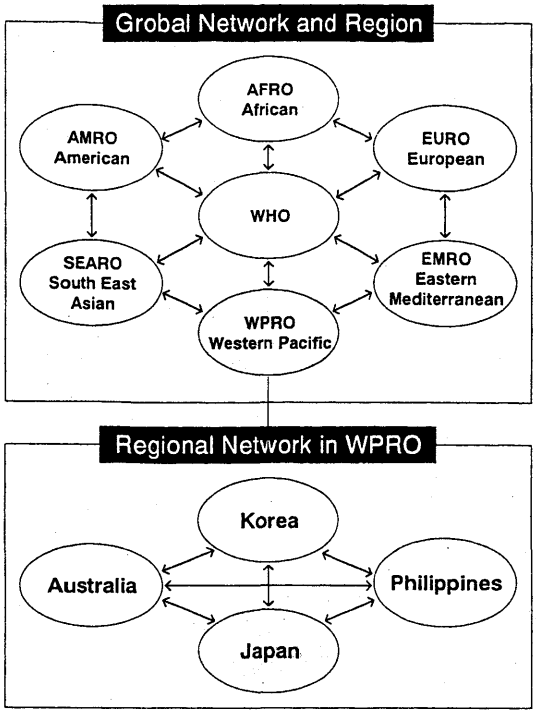

図1　組織

聖路加国際病院から川名典子婦長がスピーカーとして参加していた。

我々は，プログラムのひとつにあったスペシャリストの育成等の看護教育に関する展示“Expo Nursing Edu”に，聖路加看護大学のブースをいただいて参加した。この企画は，世界中の様々な機関で行われている教育課程を一同に展示するものであった。スペシャリストの課程，大学院課程，ナースプラクテッショナー，短期の養成プログラム（大学や病院で行われている）が対象であった。看護教育についてこの展示会場で地球規模に交流をしようという企画であり，一般の研究報告と同様に募集された。本学のWHO連絡委員会に参加の意思表示をし，登録費等の援助をいただき参加した。

Ⅱ．Expo Nursing Edu：展示品の製作

展示ブースというものについては，ICMやICNなど国際学会でよく行われていたので，やり方については理解をしていた。与えられたブースの大きさは6㎡（2m×3m）で高さ2.5mであり，そこに電源と机と椅子が一組設置されているという情報であった。

展示内容を大きく3部に分けて考えた。第1部は，本学の地理的位置を示し，建学の精神をはじめ，教育理念やカリキュラムを説明した。第2部は，スペシャリストとしての助産婦の育成課程に焦点を当て，そのカリキュラムや教育方法を中心に，助産に関する専門科目の説明を示した。第3部には，大学院教育のカリキュラムや実績，さらに大学全体の活動を示した。

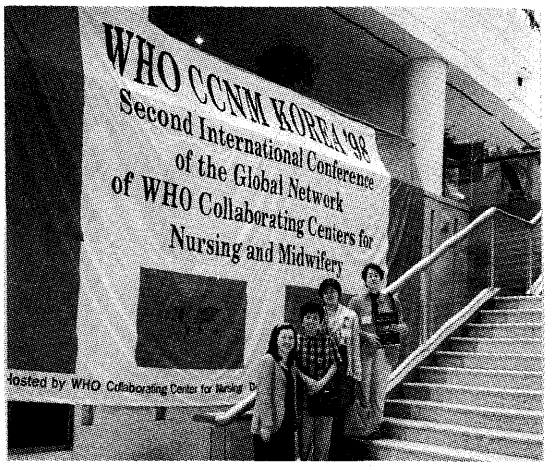

写真1　カンファレンス会場

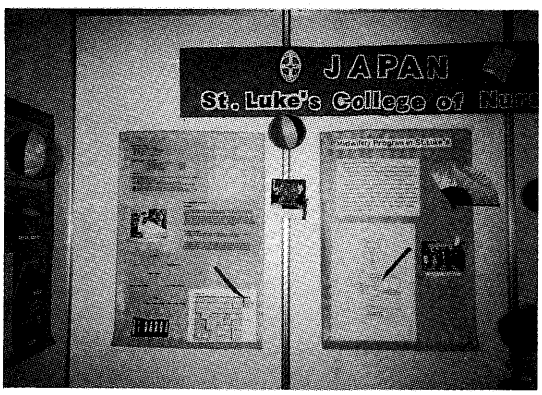

写真2　パネルの一部

韓国には，助産婦という名称での独立した職業がないという情報であったので，助産婦の教育について紹介したいと考え，特に，1998年から始めている「小グループによる事例学習」の実際[2]について紹介し，討議できることを願った（写真2）。

パネルは，和紙をベースにして英語での文字表現だけでなく，図表を用いた展示を多くし，写真も用いた。日本のイメージを出すために，赤い提灯や「いらっしゃいませ」ののぼりや扇子，紙風船，歌舞伎のカードを飾った。さらに，パソコンを持参し，本学図書館と学校案内のホームページ画面をフロッピーに保存して持参し，提示できるようにした。

Ⅲ. 展示会場での反応

Expo Nursing Eduに参加したのは19団体であり，会場にはブースがコの字型に設置され，その中央の空間には，34のポスターセッションの発表がパネルを用いて行われた。(写真３，４)

本学のブースは，会場の入り口近くにあり，右隣は韓国のPusan Catholic Collegeで，左隣は本学大学院教授のHolzemer先生のいらっしゃるカリフォルニア大学サンフランシスコ校であった。

２日間開催され立ち寄る参加者は，メインプログラムの休憩時間に少し混雑したが，全体的にはゆったりと三々五々訪れた。

参加者の反応は，助産に関する教育に関するものの中では，実習施設での学生の学習についてであった。特に助産所におけるケアやシステムに質問が集まった。

また，大学院教育に関する質問も多く，留学生を受け入れているかという質問が繰り返された。英語が読めて書く力があっても，日本語ができないと入学できないのかと詰め寄られ，戸惑った。本学における留学生は日本語で勉学できる能力を持っていることが条件となるので，この質問に対して答えるのには非常に肩身が狭く，本学の課題であることを再認識した。

特に，大学院博士課程をもっていることに対する関心が高く，課程修了者が２桁いることに対して評価が高かった。

また，ホームページに関しては，日本語表示であったので，英語表示を希望され，またこの時点では学外からはアクセスできなかったので，外国からもアクセスできるようにという希望をたくさんいただいた（この件に関しては，帰国後の教授会で提案し，現在は学外からのアクセスは可能である)。

また，ブースの良いところは，他のカンファレンス・プログラムには参加できないが，居ながらにして世界の看護の有名人に会えることであり，直に質問したり，話しかけられるという利点であった。ジュネーブのWHO本部の看護専門官であるHirschfeld氏をはじめ，UCSFの学部長のNorbeck氏，ICMの副会長のThompson氏，過去に聖路加看護大学の特別講義にいらしたMartinson氏，Holzemer氏や，もちろん学会長のKim氏とも直接話ができ，とても印象的な機会に恵まれた。国際学会では限られた時間の中でのプログラム進行であり，大会場であるので，質問することに躊躇するが，壇上の人もこのブースに寄って来てくれる時は，時間的にもゆったりとしているし，非常に気軽に話しかけられる存在であった（写真５)。

また，堀内は，1994年にボツワナで開催されたセンター長会議に出席していたので，そのときに知り合った人々にも再会できた。比較的固定化した人物がセンター長としてその任務を遂行している印象を持った。

さらに，驚いたことにこのブースでのやりとりが，シンポジウムでのひとつのエピソードとして語られたというのを，参加していた他の人から聞いた。Botswana大学のセンター長のSeboni氏が，本学のブースを訪れたとき，「日本にはキリスト教者が少ないと聞いたが，ど

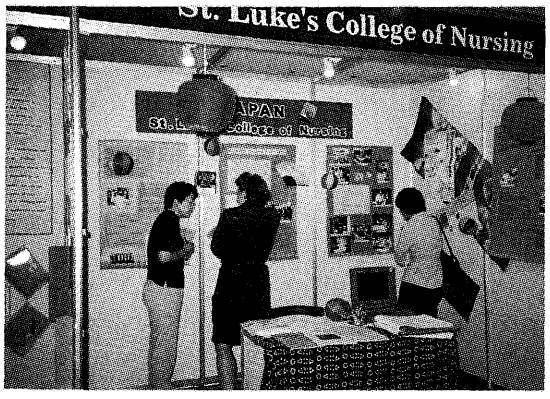

写真３　参加者への説明風景

写真４　ポスターセッション

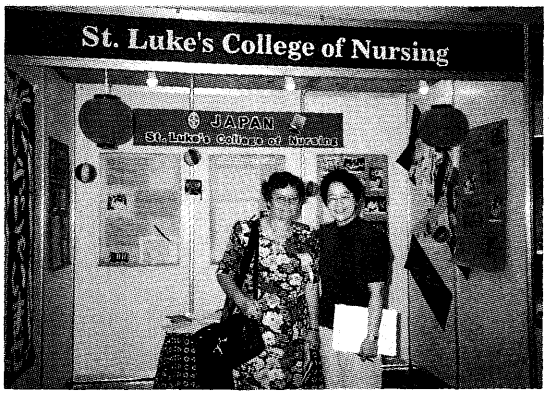

写真５　Hirschfeld氏と著者

うやってキリスト教精神を伝えるのか」という質問をされた。それに対し，「本学はキリスト教の信者のみがもつ精神ではなく，本学の教育の中にはキリスト教精神を基盤とした，人間と人間との関係性やHospitalityを重要視しているし，それは信者でなくても可能である」と回答したエピソードであった。このやりとりがメイン会場において紹介され，学会場と展示会場とが繋がっていることがわかり，わくわくした思いを抱いた。

Ⅳ．各国ブースの紹介

各国のブースではどのような展示が行われていたか見てみよう。

〈大学の展示〉

George Mason University of Michigan（写真６）のブースでは，大学案内が主としての展示であった。紹介の方法として大きなテレビを持参し，宣伝のためのビデオを繰り返し放映していた。ビデオのはじめに，この大学が輩出した有名な人類学者のマーガレット・ミードの語りとその功績の紹介があり，大学施設の紹介の他，看護技術の演習の授業風景が映し出されていた。また，大学主催で2000年に開催予定の学会の宣伝もパンフレットの配布とともに行われていた。

同様に，大学説明が主であったブースは他に，UCSF, University of Manchester, Yonsei University, The Hong Kong Polytechnic University, Kyung Pook National University, University of Sydney, Pusan Catholic College, Case Western Reserve Universityなどであった。

印象的であったのは，インターネットを使った教育であり，学内での利用状況を報告するところが多かったことはもちろんであるが，さらに異なる国々で同じ授業を聞いて討議するという，国際的な教育の連携の実際であった。世界10カ国とリンクしながら授業を展開しているところもあった。

様々な大学案内のパンフレットやCD－ROMでの案内があり，内容的には，教科目標や内容の要約が掲載されていたり，教員の研究テーマや獲得している研究基金のリストが表示されていた。

また，ほとんどのブースでは，自国で開催予定の国際学会の宣伝パンフレットやポスターが貼られていた。国際的な看護教育・研究・実践の交流が非常に普及し，常時どこかで看護関連の国際学会が開催されているのだということを実感した。

〈Regionalレベルの活動報告〉（AFRO地区）

アフリカ地域のWHOコラボレイティングセンターの活動報告があった。教育に関して，病院で働く准看護婦とそれを管理する看護婦の養成，コミュミティで働く専門家の養成のニードが山積みにあるのに対し，人的・物的パワー不足や予算削減状況，そして大学教育の孤立や偏りが指摘されていた。

東南アジア地域（SEARO地区）のブースも展示され，主に，Safe Motherhoodに関連したプロジェクトの活動報告であった。ユニセフ（UNICEF）や国連人口基金（UNAPF）との共同での活動が示されていた。おそらく他の多くの非政府組織（NGO）とも連携しあって，Safe Motherhoodにむけての動きがあるのだろうと，多様なセンターの働き方に思いを巡らした。

〈地球規模の連携についての提案〉（写真７）

このWHOコラボレーティングセンターのネットワーキングについての提言をしているブースがあった。それは，前回の開催国であったバーレーン（Bahrain）である。

４つの柱からなる〈Data Bank Model〉を提案していた。柱とは，次の視点であった。

写真６　ジョージ・メイソン大学のブース

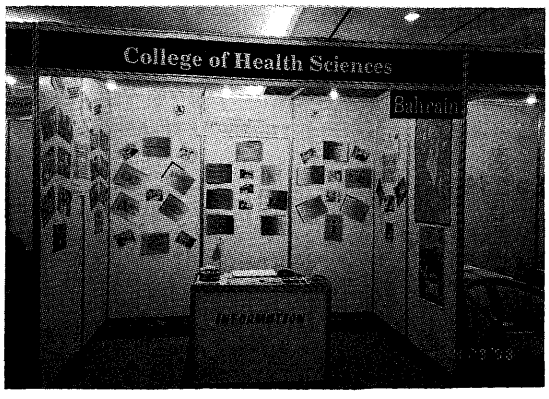

写真７　バーレーンのブース

看護研究（活動内容・人材登録）
看護管理（政府の保健医療計画・看護業務量の一覧）
看護実践（臨床実践・保健サービス設備）
看護教育（教育機関・看護学生の成果・看護教育のスタンダード）

センターが共同する目的として，次の6つを挙げていた。①センターでの看護教育研究開発のモニタリングの促進，②情報交換，③互いの強さと弱さを見つめ合うこと，④看護の知識の共有，⑤国際看護のデータの共有，⑥国レベルでの健康教育をサポートすることであった。

ここでは，Global，Regional，Country，Centerレベルでの活動連携が重要であること，地域の視点と地球規模の視点の双方をもつことがメンバーの責務であるとの主張であった。このモデルの提示は，この会議のひとつのビジョンを指し示しているのだと考えさせられた。

帰国して8ケ月後に，次期のジュネーブWHO本部の専門官が，Hirschfeld氏から，BahrainのAl-Gasseer氏に交代するというニュースを聞き「なるほど」と納得し，明解な主張を示していたブースを思い出したのであった。

V．おわりに

会議の最終日にはビッグニュースが飛び込んできた。会長であった，延世大学のKim氏が，韓国の新しい厚生大臣として任命されたということであった。すごいことである。看護大学の学長が厚生大臣になってしまうのであるから，Yonsei大学のブースにKim氏の著書が並べられ，その名前が「韓国の夢」であったと記憶しているが，夢がひとつずつ現実となったわけであった。

今回のカンファレンスに参加して感じたことは，国際会議の参加目的には様々な視点があるということ。この会議においては，特別な看護領域の研究成果を発表しあい，その研究の段階的発展を望むという目的ではく，国際的な比較・交流が主となるという点である。研究の高度水準の追求というより，各センターの特殊性を強調し，それが異国間での情報交換になったり，自国に必要な視点は何かを見つけるものであった。

本学のセンターの目標を今一度読んでみると，7番目に記されているように，「プライマリーヘルスケアに関する教育・研究・実践領域においての国際的なコラボレーションをサポートすること」とある。本学の教員すべてがWHOコラボレーションセンターの一員として，何らかの貢献をすることが求められている。機会のある度に，自分のできることは何かを見つめながら，センターの一員として参画していきたいものである。夜空に輝く何億という星のひとつひとつに存在の意味があるように，ひとりひとりのなせる業に意味があると思う。

2000年には英国Manchester大学で会議の開催が予定されている。

引用文献

1．聖路加看護大学　看護開発協力センター：WHOニュース：看護，147－148，1998.
2．佐藤直美，有森直子，片桐麻州美他：助産課程における診断能力を育む援助方法の試み，聖路加看護大学紀要，24，60－65，1998.

Participation in the Second International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centers for Nursing and Midwifery

Shigeko Horiuchi, Yaeko Kataoka, Masumi Katagiri, Naoko Arimori, Taeko Mohri

Abstract

The Second International Conference of the Global Network of WHO Collaborating Centres for Nursing and Midwifery was held in Korea this past year. St. Luke's College of Nursing joined in the poster session in the "Expo Nursing Edu" which focused on nursing education, specifically education for nursing specialists. The midwifery curriculum and master and doctoral courses were introduced in the poster session. Information exchange and discussion at this session gave us an opportunity to learn more about the current status of education in universities in various countries and territories. Throughout the conference, we found opportunities for collaboration within the global network, regional offices, countries and centers. We also gained a greater understanding of global and regional viewpoints, and we obtained information and recommendations as to our role as a member of the WHO Collaborating Centres.

Key words:
WHO, Collaborating Centers, Nursing Education